

2022年4月17日 イースター礼拝 「見えないものを信じる」 高橋克樹牧師
聖書 イザヤ書42所10〜16節、ヨハネ福音書20章1〜18節

主イエスが十字架にかけられて死んだのち、その遺体がアリマタヤ出身のヨセフによつて十字架から降ろされました。その遺体はユダヤ人の埋葬の習慣に従つて香料を添えて亜麻布で包まれ、墓に埋葬されました。それから二日目の日曜日の朝早く、マグダラのマリアが墓に行つてみると、墓の入り口を塞いでいた大きな石が取りのけてあるのを見たのです。そこでマリアの取つた行動はやや不可解で、墓の中にイエスの遺体があるかどうかを確認せずに、シモン・ペトロのところへ行つて、『主が墓から取り去られました。どこに置かれているのか、わたしたちには分かりません』と告げたのでした。けれども、墓の入り口の大きな石が取りのけてあるだけで、イエスの遺体が盗まれたと、どうして結論づけたのか。それは『主が墓から取り去られました』の原文では「彼らは主を墓から取り去つた」となつていて、日本語には訳出されていない。「彼ら」が原文にはあるからです。マリアは誰か分からないけれども「彼ら」が主の遺体を墓から持ち去つたと考えたのです。

だから、ペトロに知らせに行つたのです。ペトロは『イエスが愛しておられたもう一人の弟子』（2節）といわれる愛弟子と墓に向かいますが、そこで見たものはイエスの遺体を包んでいた「亜麻布」があるだけで、遺体がないことを『見て』、つまり、目で遺体を見ることができないことでペトロと愛弟子はイエスが復活したことを信じたのでした。8節にあるように、二人は空の墓の中を見て、イエスの復活を信じたのです。けれども、9節にあるように、ペトロと愛弟子は空虚な墓を見てイエスの復活を信じたものの、死人からイエスが甦らなければならぬという聖書の言葉を『二人はまだ理解していなかった』という断り書きがされていて、読者に対して注意が喚起されています。死人のうちからイエスがよみがえるべきことを書いた旧約聖書の預言を、二人はまだ悟つていなかったからです。ペトロと愛弟子は空虚な墓を見てイエスの復活を信じたものの、まだ復活の意味をすべて理解したわけではないことを、ヨハネ福音書を書いた記者は読者に注意喚起しているのです。

ここまでみてくると、この復活のエピソードの焦点は、空虚な墓の事実から信仰者が何を発見するかにあることがわかります。目に見えるかたちで復活したイエスの存在が確認できないことが、逆説的にイエスに対する信仰につながるのです。信仰の世界においては目に見えない事実によつて真実が見えてくる契機となるのです。普段、私たち人間は意識ある主体として行動し、知覚できるものによつて自分は何を得ることが出来るのか、自分にとつて何が有益であるかを判断しながら生きています。そのため、知覚できることだけを事実として受け止めて、見えないものは除外して信じる対象にはしません。

けれども、初代教会では、復活のイエスのことがこの世的な知覚では見ることができないけれども、信仰的な知覚では信じることができる対象であることとみなされて

いて、見えないものを信じることは幸いなことだと考えられていました。

この「見たことがないのに信じることの幸いだ」という信仰的な立場は、イエスがトマスに『わたしを見たから信じたのか。見えないのに信じる人は、幸いである』と、このあとの20章29節に出てくる言葉で明らかにあります。

ただ、本日のテキストでは「見る」と信じることを直結していません。むしろ、見ることが信じることを妨げる結果になりやすいことが描かれています。パウロが『見えるものに対する希望は希望ではありません。現に見ているものをだれがなお望むでしょうか』(ローマ8章24節)と指摘しているように、『目に見えるものによらず、信仰によって歩んでいく』(IIコリント5章7節)ことが大切なのです。見えないものは不確かで、見えるものが確かなものであるという考えは、私たちが受けてきた教育では当たり前のことですし、この世的にも常識的なことです。

マリアは墓の入口の石が取りのけられて、墓を封印した石が「ない」のを『見る』ことから認識の転換が起こっています。石が「ない」ことを見たことで、復活という出来事が「起こった」という信仰的確信が生じたのです。愛弟子もペトロも同じく遺体が「ない」状況を『見て』イエスの復活を『信じた』のです。ここで共通していることは、見えないものを見て信仰の歩みを進めていくことの大切さです。

11節以下ではマリアのイエスに対する姿勢を通して、復活の意味が明らかになっていくきます。『マリアは墓の外に立って泣いていた』の直訳は「マリアは墓のところまで泣きながら外に立っていた」です。マリアはいつの間にか墓に戻っていて、墓の外で突っ立ったまま泣いたのです。マリアの墓への執着は、生前のイエスに執着している彼女の姿を現わしています。イエスが殺された今となっては、その遺体を確かめて引き取る以外に、生前のイエスとのつながりを確認する道はないと思っていたのでしよう。イエスの死によって自分の生きる意味も失われたと考え、彼女は死と滅びという人間的な領域にとどまったままでした。マリアは墓の外で「泣いている」のですが、それは13節と15節でも繰り返し描かれています。それは16章20節で『あなたがたは悲しむが、その悲しみは喜びに変わる』というイエスの約束の言葉を想起させます。これはその舞台設定をつくっているのです。

さて、14〜18節がこの物語の核心です。マリアが目で復活のイエスを「見て」、しかも話を「聞いて」いるのに、イエスだと気づかないのです。マリアは見ているのにイエスだと気づかないということは、この物語の核心が「信仰の上でイエスを認識すること」についてであることを示しています。マリアがイエスだとわからなかったということは、復活者イエスが生前のイエスと同じかたちで見ることができないことを示しています。この世的な地上の目では復活のイエスはすぐにはわからない！ヨハネ福音記者は、復活者イエスを見た人が自動的に信仰者になるのではなく、むしろ見えないところに「復活のイエス」を信じるように決断することを迫っているのです。

別の視点でみると、マリアが『うしろを振り向いて』復活のイエスを『見る』(1

4節)のですが、マリアの意識はイエスの遺体を探すことにあるので、復活のイエスを認めることができません。しかし、死という決定的な別れ、終わりがあって初めて本当の意味での再会、つながりが生まれるのです。目で見えるという関係性が切れることで、真実につながるようになっていくのです。

15節でイエスがマリアに『だれを捜しているのか』と問うことで見えないものを信じるという信仰の核心部分が明らかになってきます。マリアのように死んだ人を収める墓の中にイエスを捜しても見つかるのは死人だけです。この『だれを捜しているのか』というイエスの問いは、イエスが逮捕される時にもイエスがローマ兵に『だれを捜しているのか』と問いかけたとき、イエスが「わたしである」と答えた際の言葉とギリシア語本文では同じなのです。もつと言えば、1章38節で最初の弟子を召すときに『何を求めているのか』とイエスが弟子を召す際に語った言葉も同じギリシア語です。誰を探しているのかという問いは、何を求めているのかという信仰的な問いかけでもあるのです。イエスの宣教の初めにイエスを求めた人々への言葉と、復活したあとにマリアへの問いかけが同じであるということは、復活の核心を明らかにするカギを提供しています。

また、マグダラのマリアは16節で再び『振り向』いています。14節で『後ろを振り向いた』のちはイエスと言葉を交わしているのですから、16節で再び振り向くことは不自然な場面設定です。しかし、ヨハネ福音書記者は、敢えてこの不自然さを犯してまでも、復活のイエスがマリアの背後から呼びかけることで、復活したイエスと日々の信仰生活の中で交わっていることを強調しているのです。マリアは復活のイエスと実際に向き合って話をした(14〜17節)し、実際に自分も復活したイエスを「見た」(18節)と証言していますが、17節で明らかになるように、復活したイエスに生かされている信仰生活にまだ気づいていないのです。

ところが、イエスの姿を見ても気づかなかったマリアでしたが、自分の名前を呼ぶ声を聞いてイエスだと気づいたマリアは「ラボニ」と呼びかけ、すがりつくとうとします。羊は飼い主の声を聞き分けますが、イエスは『わたしにすがりつくのはよしなさい』(20章17節)と告げます。ここで『すがりつく』行為は、復活したイエスが手で触ることができる何らかの身体を持った存在に類するものであることを暗示しています。マリアは復活したイエスが体をもって復活したかのように、すがりつくようになったのです。しかし、それは復活したイエスによって拒絶されます。

マグダラのマリアが墓の入口の石が取りのけられて封印した石が「ない」ことを『見る』ことによって、ヨハネ福音書記者は地上の信仰者の認識の転換を促すための枠組みを設定しているのです。結論的には、日常の信仰生活において聖霊を受ける備えをしながら過ごすべきなのです。目に見えるかたちで復活したイエスを見て触れることができなければ信じない、というようなトマス的な信仰の段階にとどまるべきではないのです。昇天後に聖霊を派遣するキリストを待ち望むことが、本当の意味で喜びとなるというわけです。

この復活物語の中でマリアは一貫して生前のイエスに執着しています。遺体がどこにあるのかに関心が集中していることをみても、そのことは明らかです。さらに、

復活したイエスに出会っても実際に触れることができなければ、復活したイエスとは信じないと考えたトマス態度でも明らかのように、イエスとの実体的な交わりを求めています。しかし、イエスが1章38節で弟子を招く際に言ったように、生きる意味をどのように求めていくかということと、目に見えない復活者イエスを信じて生きることはつながっているのです。

マリアはイエスの遺体を探しているのですが、それは見当はずれなのです。だから、「何を求めているか」わからないマリアに対して、聖霊によるキリストの臨在の中で信仰生活をするように促すのです。

マリアは墓の中で二人の天使を『見た』のですが、いまだに生前のイエスに固執していたので、復活のイエスが見えないのです。だから、復活のイエスから呼びかけられて後ろを振り向いて、そこに立っているイエスを『見る』ことになっても、それでもイエスだとはわからなかったのです。復活したイエスは天の父である神のもとに戻っていくので、地上の信仰者は来たるべき聖霊を受ける備えをすべきなのです。それゆえに過渡的な復活のイエスに執着するべきではなく、昇天後の霊的なキリストを待ち望むことが大切なのです。聖霊は目には見えませんが、霊的なキリストはこの世に生きる者に働きかけて、それまでの目に見えるものに執着する生き方を断ち切ることを促します。

私たちは健康やお金、仕事の成果などにこだわって生きてしまいがちです。それらは人間を評価する際に最も分かりやすい指標となりますので、どうしてもそれらに執着した生き方になりがちです。けれども、復活したイエスは、見えるものではなく、見えないものに目を注ぐことの大切さを身をもって示して下さいました。マリアもペトロも愛弟子も見えないイエスの姿から、復活を最終的には信じる者へと変えられていきますが、そこには復活したイエスの働きかけがあったからこそ、信じることができる者へと変えられたのです。現代に生きる私たちに対しても、復活したイエスが目に見えないものに目を注ぐように招いておられます。その聖霊の導きを信じて、何を求めて生きていくかをそれぞれの人生で考えながら、生きていきましょう。